

2
士師
聖徒伝 68

「主の霊が 臨むなら」

士師記3章 オテニエル・エフデ・シャムガル

【今日のアウトライン】

0. イントロダクション

I. 士師オテニエル 3章1～11節

II. 士師エフデ

シヤムガル 3章12～31節

III. まとめと適用

戦う力は主から来る

第一に御霊に満たされよう



【無垢の時代】

【良心の時代】

【人類統治の時代】

【約束の時代】

【律法の時代】

【恵みの時代】

【御国の時代】

天地創造

墮罪
~大洪水

バベルの塔事件

アブラハム
~ヤコブ

イスラエル
王国時代
メシア初臨

聖霊降臨
世界宣教
メシア再臨

千年王国
大審判
新天新地

①エデン契約

②アダム契約

③ノア契約

④アブラハム契約

⑤モーセ契約

⑥土地の契約

⑦ダビデ契約

⑧新しい契約

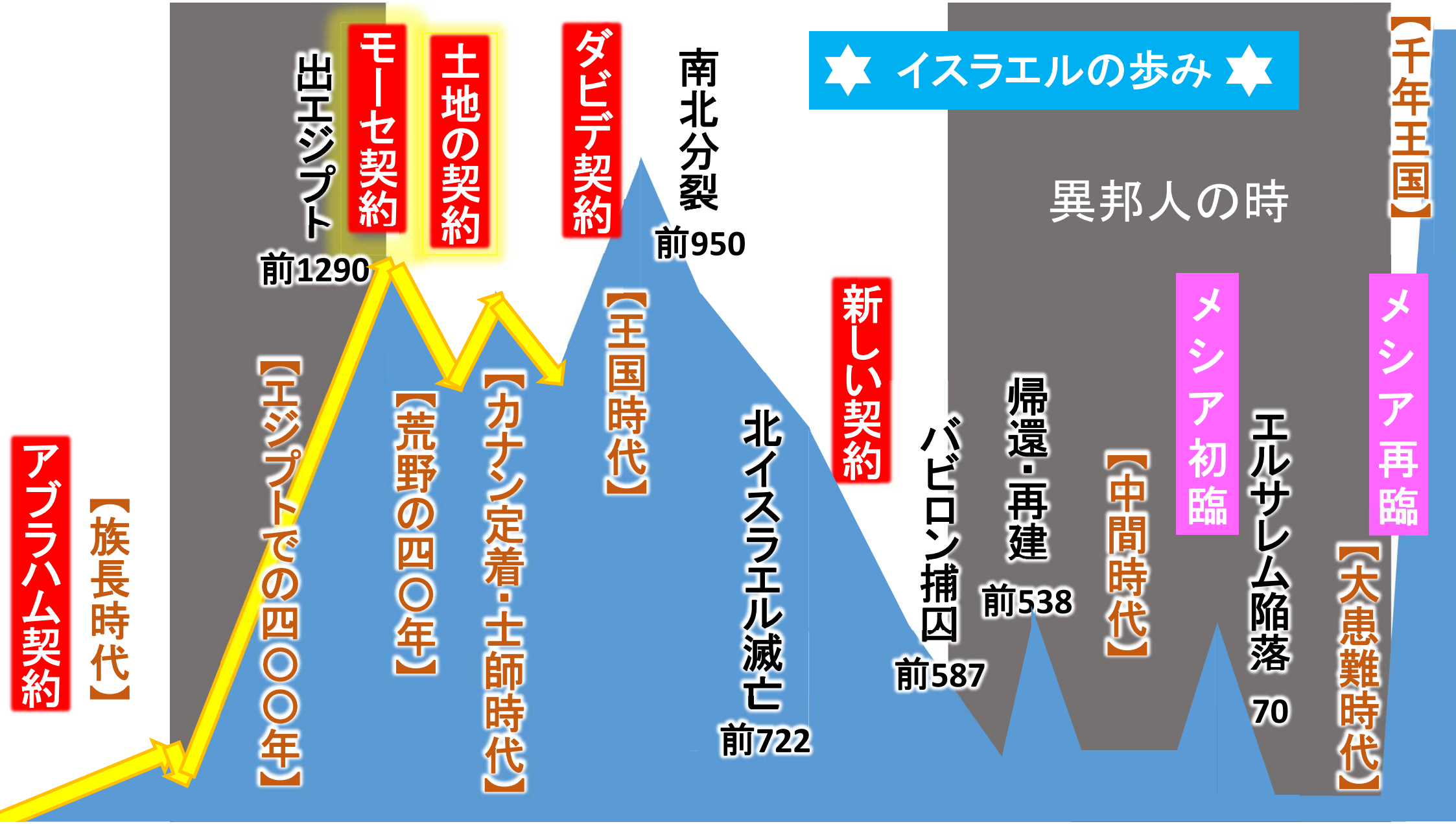
神の約束が、人類と世界の歴史を導く!!

過去

現在

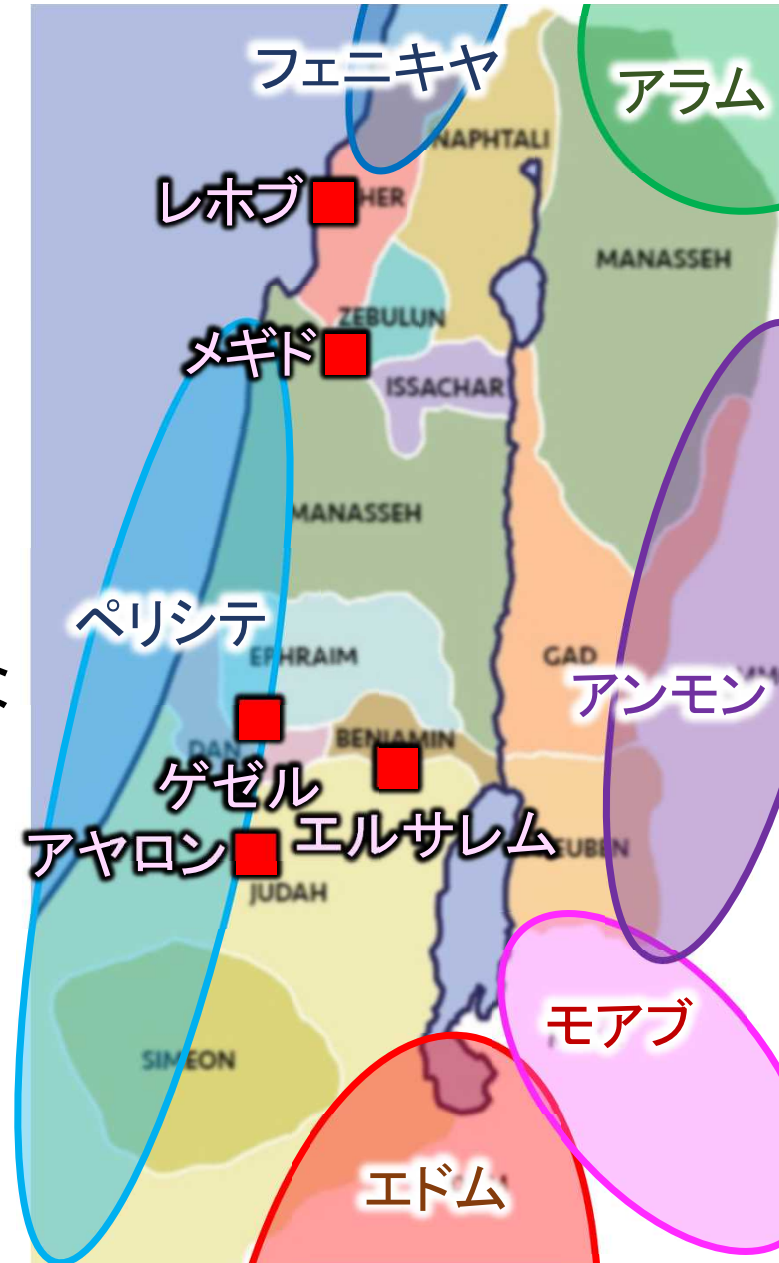
未来

★ イスラエルの歩み ★



【残された土地】

- ヨシュアに率いられたイスラエルは、12部族それぞれの相続地を手に入れた。
- しかし、未征服の地がまだ多く残っていた。
- カナン人の町が要所にあり、周囲にも、強力な民族がいて、イスラエルを脅かしていた。



【士師とは？】

- 神が立てたイスラエルの一部族のリーダー。
裁判官。政治的、軍事的指導者。
民の解放者、救済者。

【士師記で繰り返されるイスラエルの罪】

- ❶ 背信 ...カナンの偶像礼拝に取り込まれる
バアル(主神)。アシュタロテ(女神)。
- ❷ 裁き ...主が異邦の民を用いてイスラエルを裁く。
- ❸ 悔い改め ...イスラエルは主に助けを求める。
- ❹ 士師による解放 ...主は、士師を送り敵を退ける。

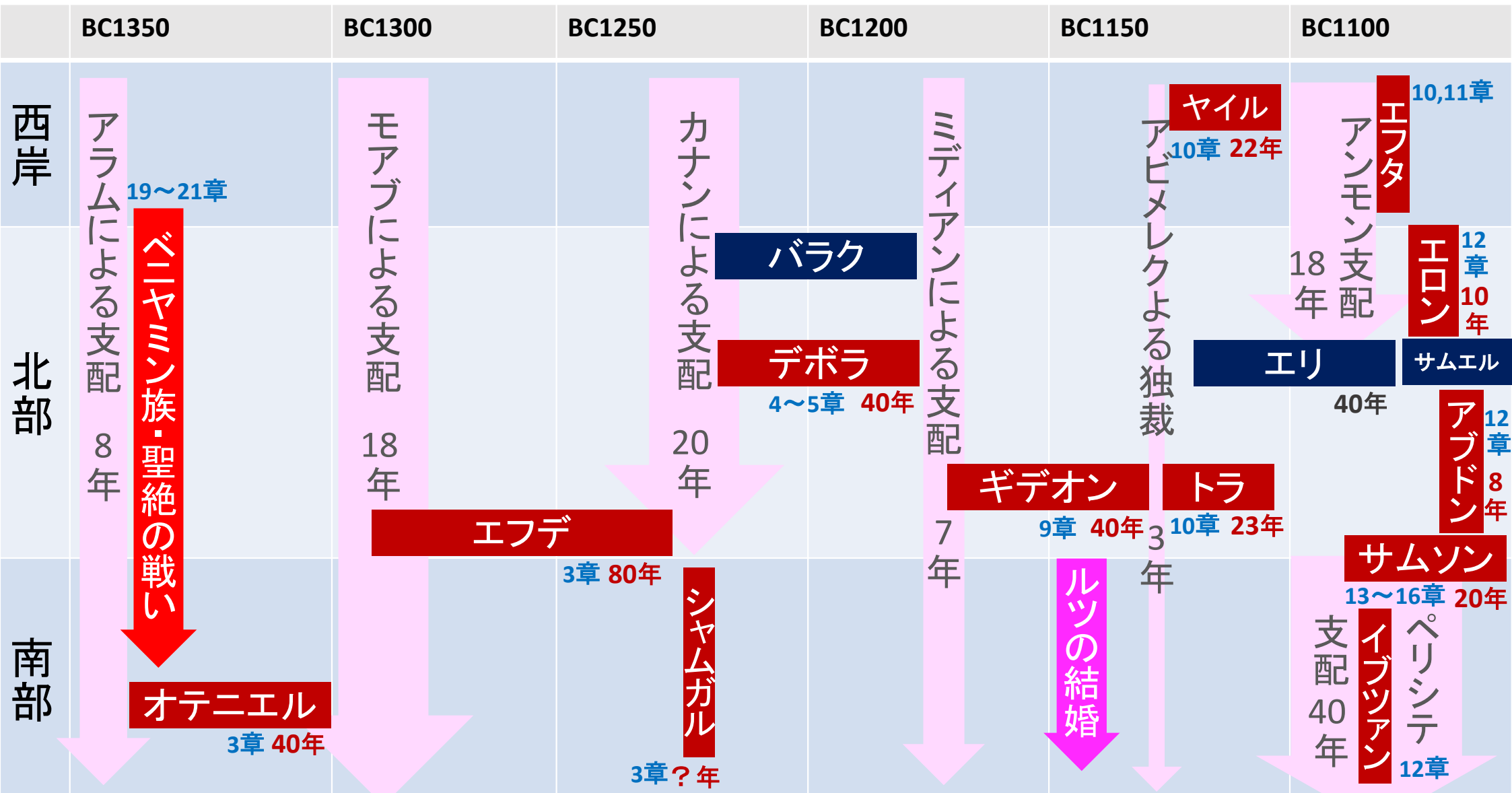


十二人の士師たち

士師	聖書	出身部族	敵
①オテニエル	3:7～11	ユダ	アラム人
②エフデ	3:12～30	ベニヤミン	モアブ人
③シャムガル	3:31	?	ペリシテ人
④デボラ	4:1～5:31	エフライム	カナン人
⑤ギデオン	9:1～56	マナセ	ミディアン人
⑥トラ	10:1～2	イッサカル	?
⑦ヤイル	10:3～5	マナセ(ギルアデ)	?
⑧エフタ	10:6～11:40	マナセ(ギルアデ)	アンモン人
⑨イプツァン	12:8～10	ユダ ベツレヘム	?
⑩エロン	12:11～12	ゼブルン	?
⑪アブドン	12:13～15	エフライム	?
⑫サムソン	13:1～16:31	ダン	ペリシテ人



【士師の時代】



I. 士師オテニエル

士師記3章1～11節



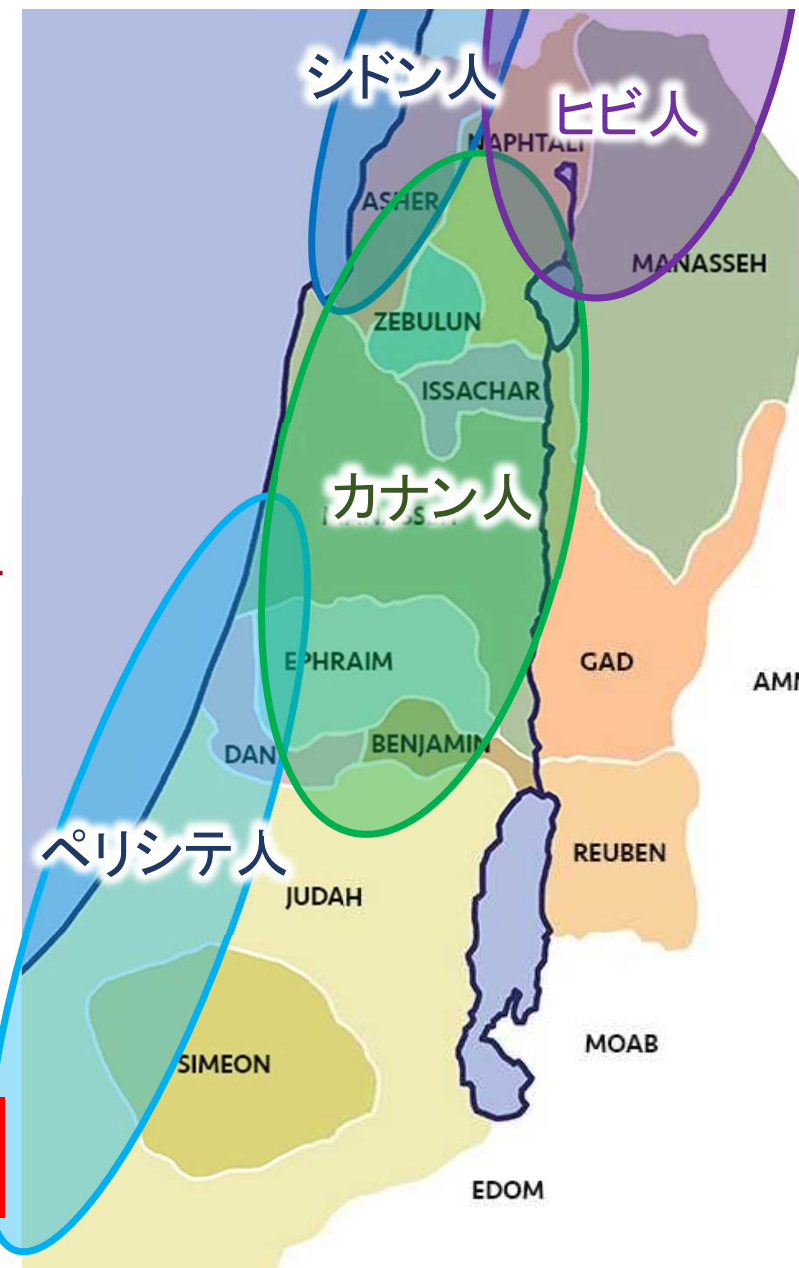
ヘブロンの山地

【残された異邦の民の意味】 士師3:1～3

次が、【主】が残しておかれた異邦の民である。主がそうされたのは、カナンでの戦いを全く知らないすべてのイスラエルを試みるためであり、ただ、イスラエルの次世代の者、特にまだ戦いを知らない者たちに、戦いを教え、知らせるためであった。

すなわち、ペリシテ人の五人の領主たち、またすべてのカナン人、シドン人、そしてヒビ人である。ヒビ人は、バアル・ヘルモン山からレボ・ハマテにまで及ぶレバノンの山地に住んでいた。

試みは、神の大きな守りの内になされること!!



【試されるイスラエル】 士師3:4～7

これは、彼らによってイスラエルを試み、【主】がモーセを通して先祖たちに命じた命令に、イスラエルが聞き従うかどうかを知るためであった。

イスラエル人は、カナン人、ヒッタイト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人のただ中に住み、彼らの娘を自分たちの妻とし、また自分たちの娘を彼らの息子に与えて、彼らの神々に仕えた。

こうしてイスラエルの子らは、【主】の目に悪であることを行い、彼らの神、【主】を忘れて、もろもろのバアルやアシェラに仕えた。

■肉体的交わりから ➡ 靈的罪・偶像礼拝へ



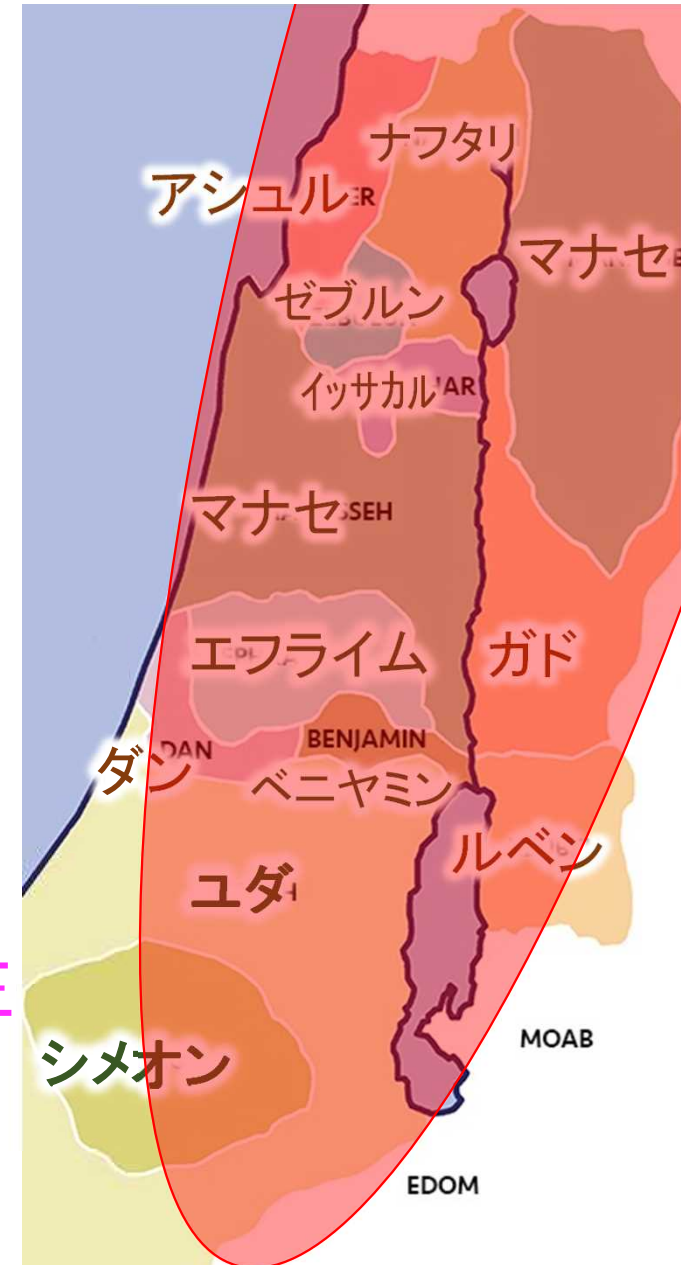
【最初の士師・オテニエル】 士師3:8～9

【主】の怒りがイスラエルに向かって燃え上がり、主は彼らをアラム・ナハラムの王クシャン・リシュアタイムの手に売り渡されたので、イスラエルの子らは八年の間、クシャン・リシュアタイムに仕えた。イスラエルの子らが【主】に叫び求めたとき、【主】はイスラエルの子らのために一人の救助者を起こして、彼らを救われた。それはカレブの同族ケナズの子オテニエルである。

* “二重に邪悪なクシャン”...北方のメソポタミアの王

* デビルの町を攻め取った、勇士オテニエル。

➡カレブの娘アクサを妻とした。(士師1:13)



【オテニエルの戦いと祝福】 士師3:10～11

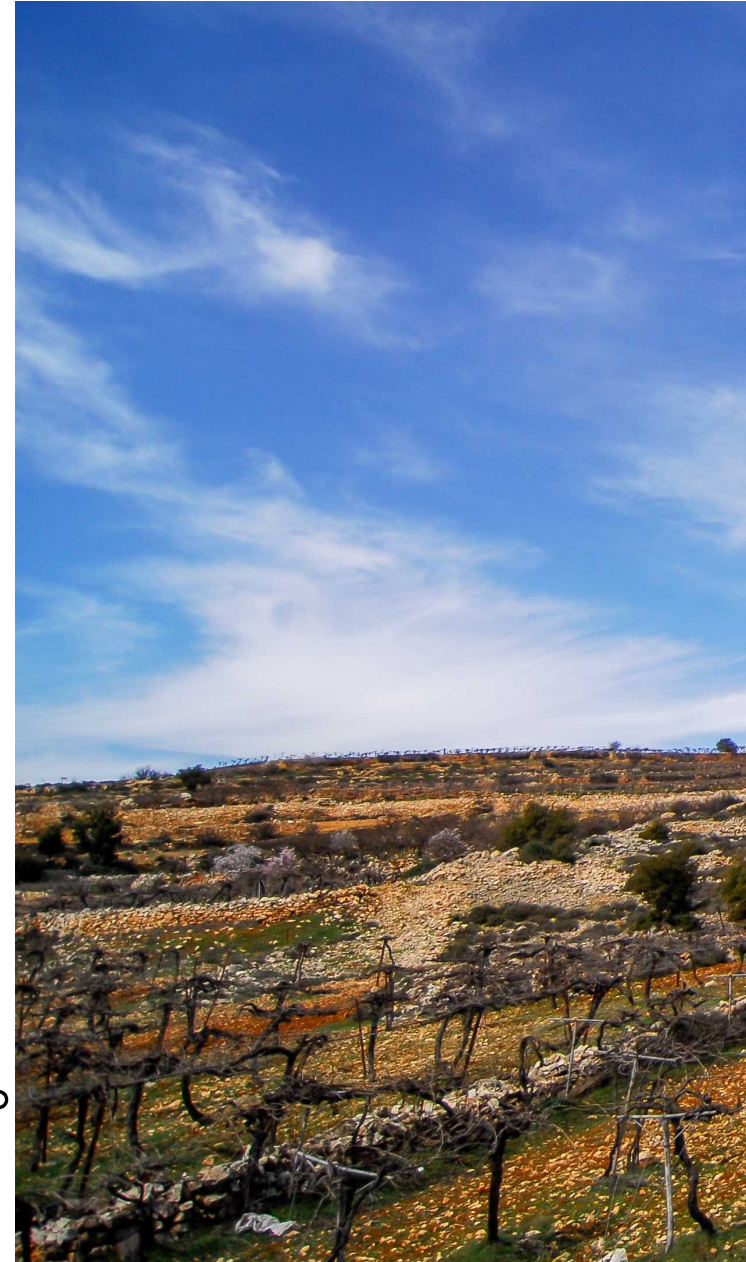
【主】の霊が彼の上に臨み、*彼はイスラエルをさばいた。 彼が戦いに出て行くと、【主】はアラムの王クシャン・リシュアタイムを彼の手に渡されたので、彼の手はクシャン・リシュアタイムを抑えた。国は四十年の間、穏やかであった。こうして、ケナズの子オテニエルは死んだ。

* 士師は、主の霊に満たされて力を与えられる。

➡ 聖霊なくして、主の戦いは戦えない!!

■ カレブの後を継ぐにふさわしい勇士オテニエル。

➡ まさにイスラエルの正統派のリーダー!!



【士師の時代】

	BC1350	BC1300	BC1250	BC1200	BC1150	BC1100
西岸						
北部						
南部						

メソポタミアによる支配 8年

オテニエル
3章 40年

★★★

Ⅱ. 士師エフデ・シヤムガル

士師記3章12～31節



誘惑の山から臨むエリコ

【ベニヤミン族の聖絶事件】 士師19～21節

- オテニエルの治世の初め頃、ベニヤミン族のギブアの男達が、一人のレビ人を犯そうとし、彼の側女を暴行して殺してしまった。
- かつてのソドムのような大罪。ギブアもベニヤミンも悔い改めず、主は、残りのイスラエルの民を用いて、ベニヤミンを裁かれた。
- ベニヤミン族の生き残りは、わずか600名。かろうじて、部族の血筋だけは保たれた。
- それから数十年後、オテニエルも死に、イスラエルは再び神への背きに陥っていく...



最悪から始まった士師の時代

すべてを象徴する事件

【士師の時代】

	BC1350	BC1300	BC1250	BC1200	BC1150	BC1100
西岸						
北部						
南部						

The diagram illustrates the period of the Judges in Israel, divided into three regions: West Coast (西岸), North (北部), and South (南部). The timeline is marked by years from BC1350 to BC1100. Key events include the Mesopotamian control (メソポタミアによる支配) from BC1350 to BC1300, the Beniamin tribe's control (ベニヤミン族・聖絶の戦い) from BC1300 to BC1250, and the Moabite control (モアブによる支配) from BC1300 to BC1100. The Othniel period (オテニエル) is marked with three stars (☆☆☆) and occurs from BC1300 to BC1250.

メソポタミアによる支配 19~21章 8年

ベニヤミン族・聖絶の戦い

☆☆☆

オテニエル 3章 40年

モアブによる支配 18年

【モアブによる支配】 士師3:12～14

イスラエルの子らは、【主】の目に悪であることを重ねて行った。そこで【主】はモアブの王エグロンを強くして、イスラエルに逆らわせた。彼らが【主】の目に悪であることを行ったからである。

エグロンはアンモン人とアマレク人を彼のもとに集め、イスラエルを攻めて打ち破った。彼らはなつめ椰子の町*を占領した。こうして、イスラエルの子らは十八年の間、モアブの王エグロンに仕えた。

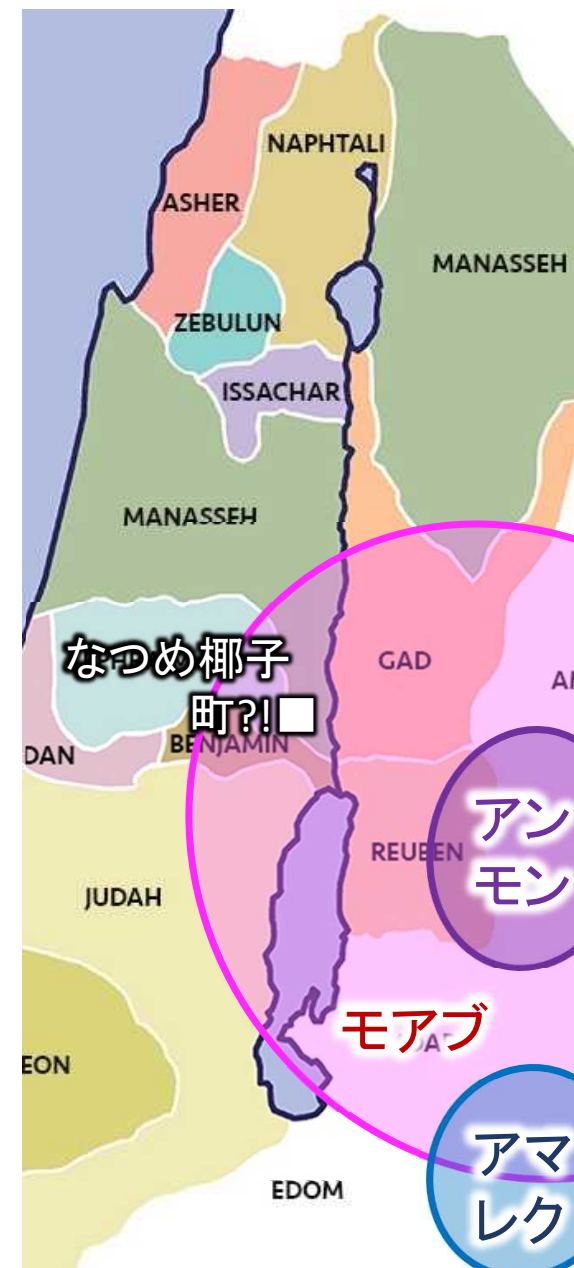
■再び罪に陥ったイスラエルを、モアブが襲った。

→モアブは、アブラハムの甥ロトの子孫。性的墮落の民。

アンモン人は、東岸で打ち破った一族の生き残り。

アマレク人は、荒野でイスラエルを襲った略奪の民。

* なつめ椰子の町?! (オアシスの町) → エリコ?!



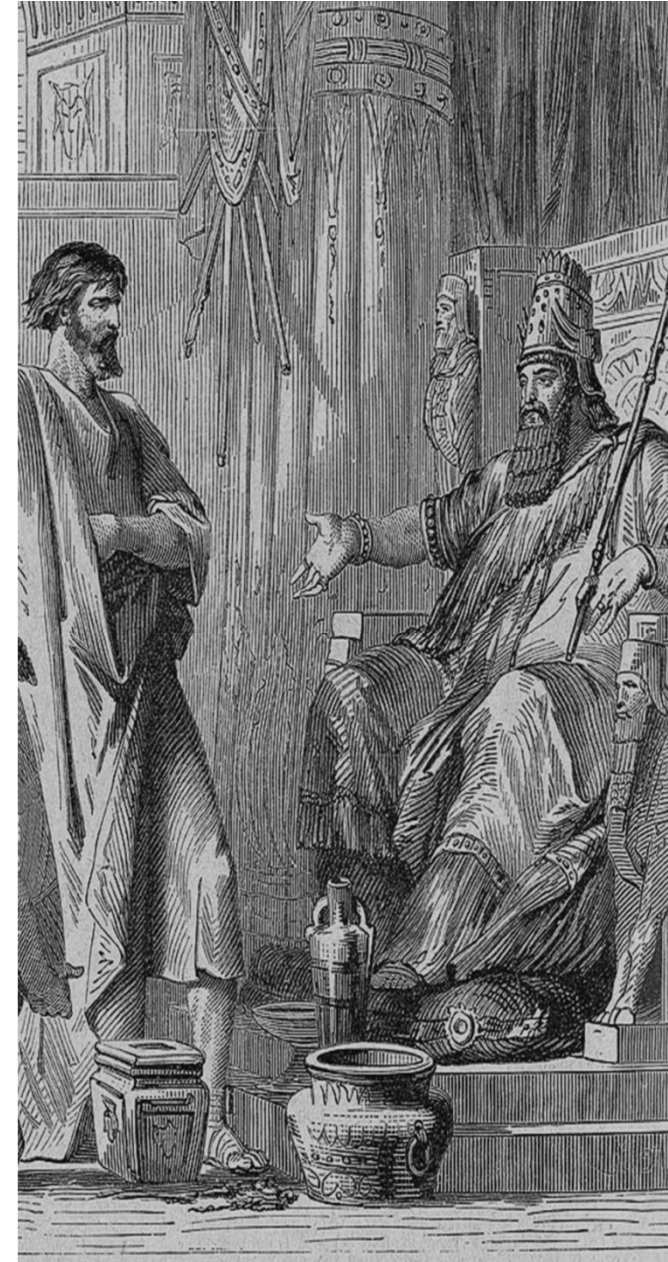
【士師・左利きのエフデ】 士師3:15～17

イスラエルの子らが【主】に叫び求めたとき、【主】は彼らのために、一人の救助者を起こされた。ベニヤミン人ゲラの子で、左利きのエフデである。イスラエルの子らは、彼の手にとりてモアブの王エグロンに貢ぎ物を送った。

エフデは長さ約一キュビト(手先から肘まで約45cm)の両刃の剣を作り、それを衣の下、右ももの上に帯で締め、モアブの王エグロンに貢ぎ物を携えて行った。エグロンはたいへん太った男であった。

■ ベニヤミン(右の手)なのに、左利きのエフデ。

➡へそ曲がり？ あまのじゃく？ アウトロー？



【暗殺】 士師3:18～21

貢ぎ物を献げ終わると、エフデは貢ぎ物を運んで来た者たちを見送り、彼自身はギルガルのそばの石切り場のところから引き返して来て、こう言った。「王様、私はあなたに秘密のお知らせがあります。」すると王は「今は、言うな」と言ったので、そばに立っていた者たちはみな、彼のところから出て行った。エフデが王のところに行くと、王は、屋上にある彼専用の涼しい部屋に一人で座していた。エフデが「あなたに神のお告げがあります」と言うと、王はその座から立ち上がった。このとき、エフデは左手を伸ばし、右ももから剣を取り出して、王の腹を刺した。



【エグロンの死】 士師3:22～25

柄も刃と一緒に入ってしまった。彼が剣を王の腹から抜かなかったので、脂肪が刃をふさいでしまった。エフデは小窓から出た。

エフデは廊下へ出て行き、屋上の部屋の戸を閉じた。このようにして、彼はかんぬきをかけた。彼が出て行くと、王のしもべたちがやって来た。彼らが見ると、屋上の部屋にかんぬきがかけられていたので、彼らは「王はきっと涼み部屋で用をたしておられるのだろう」と思った。

しかし、いつまで待っても、王が屋上の部屋の戸を一向に開けようとしないので、しもべたちは鍵を取って戸を開けた。すると、なんと、彼らの主人は床に倒れて死んでいた。



【反撃の角笛】 士師3:26～28

エフデは、しもべたちが手間取っている間に逃れ、石切り場のところを通過して、セイラに逃れた。

到着すると、彼はエフライムの山地で角笛を吹き鳴らした。イスラエルの子らは、彼と一緒に山地から下って行った。彼がその先頭に立った。

エフデは彼らに言った。「私の後について来なさい。【主】はあなたがたの敵モアブ人を、あなたがたの手に渡されたから。」そこで彼らはエフデの後について下り、モアブへ通じるヨルダン川の渡し場を攻め取って、一人もそこを渡らせなかった。

■モアブ軍をヨルダン川対岸に追い返したエフデ。

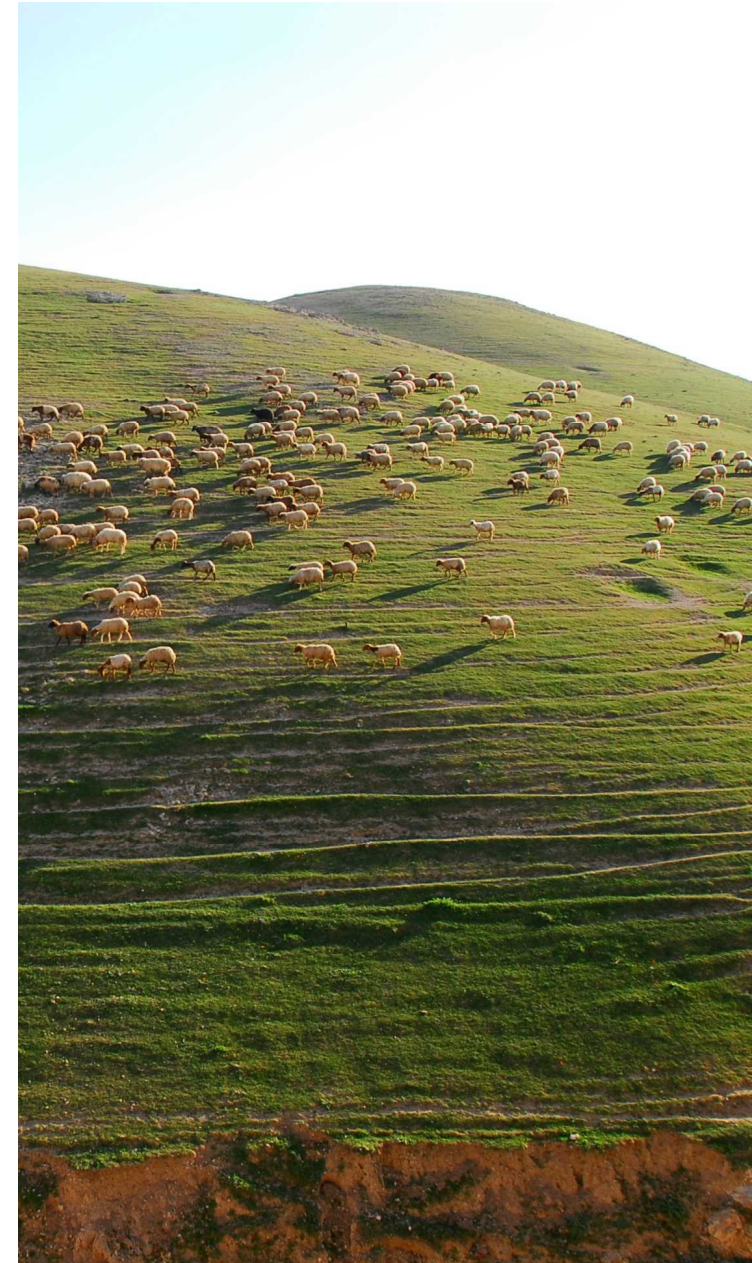


【もたらされた平和】 士師3:29～30

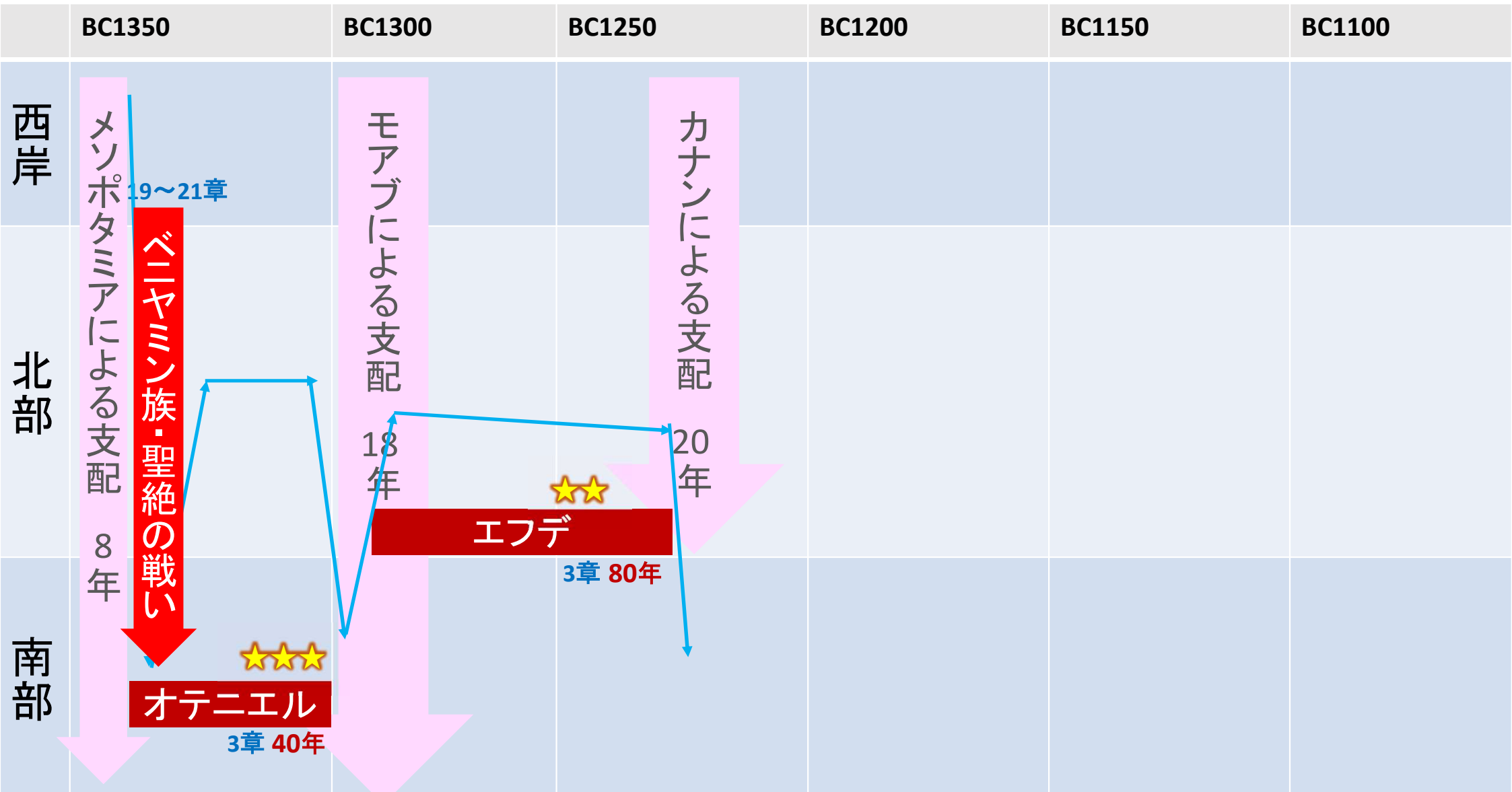
このとき彼らは約一万人のモアブ人を討ち取った。そのモアブ人はみな、頑強で、力のある者たちだったが、一人として逃れた者はいなかった。こうして、モアブはその日イスラエルの手に下り、国は八十年の間、穏やかであった。*

* エフデ時代は、士師で最長、80年の平和の時
➡次は、オテニエル、デボラ、ギデオンの40年。

■ 一時、滅亡に瀕したベニヤミンの子孫エフデ。
➡主が憐れみの内に、エフデを用いられた。



【士師の時代】



【異端の士師・シャムガル】 士師3:31

エフデの後にアナトの子シャムガルが起こり、牛を追う棒でペリシテ人六百人を打ち殺した。彼もまた、イスラエルを救った。

* シャムガル ➡ “シミグ神が賜った”

アナト ➡ カナンの戦いと性の女神の名。

■ シャムガルは、カナン人？混血児？(諸説あり)

➡ 両親が、カナン神を崇拝していた？

■ 敵は、強大な海洋民族ペリシテ。

■ 無名の牛飼いが、ろくな武器もなく、強敵を打ち破り、イスラエルを救った。



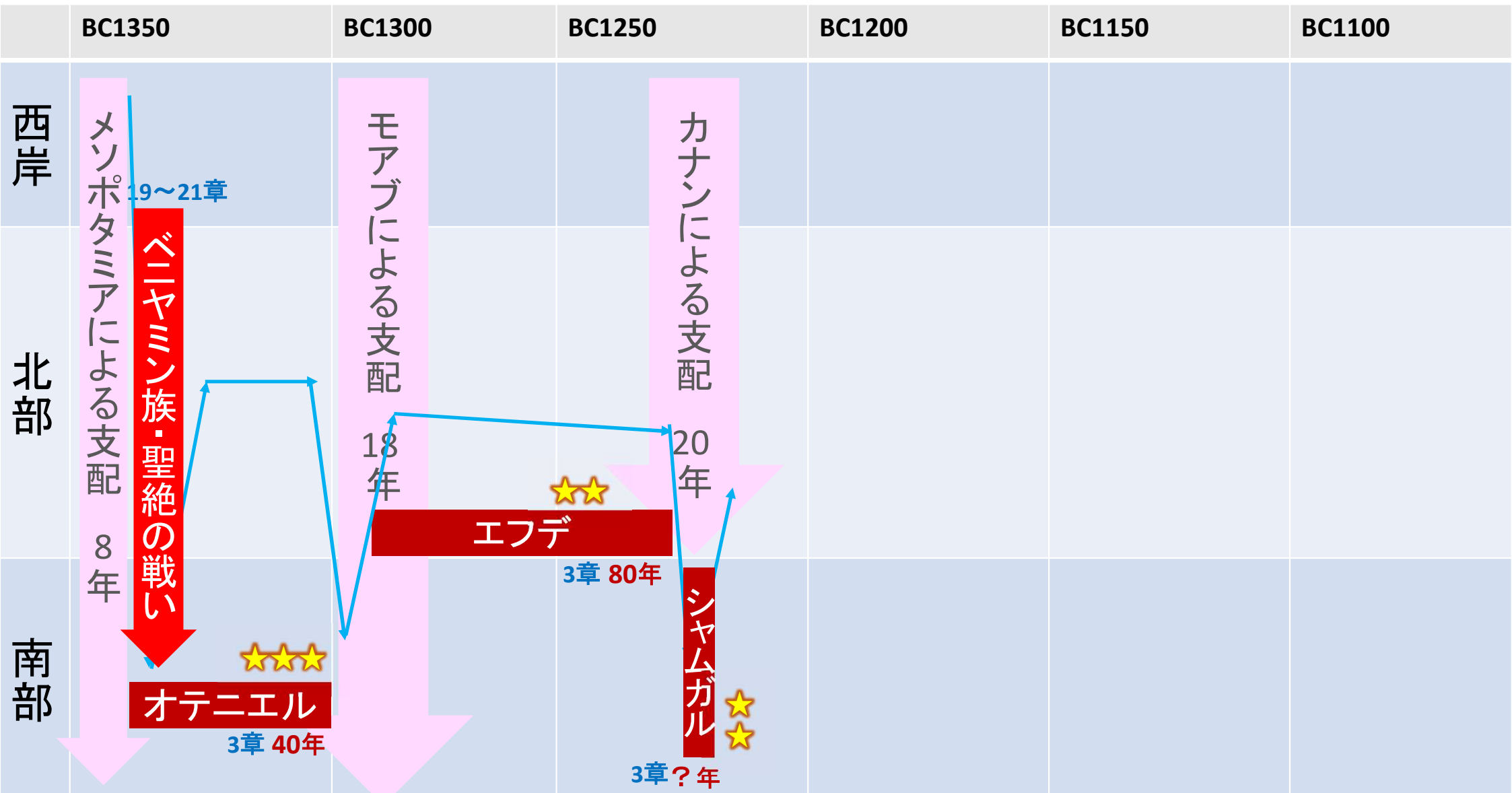
牛の突き棒
2,5mほどの棒



突き棒の
先端の金具

主がシャムガルを用いられた!!

【士師の時代】



Ⅲ. まとめと適用

戦う力は主から来る
第一に御霊に満たされよう

雨期の荒野に咲くアネモネの花

【士師オテニエル、エフデ、シャムガル】

■ オテニエル ...カレブの志を継ぐ勇士。正統派のイスラエル指導者。

謙遜な信仰者にして勇敢な戦士。40年の平和をもたらす。

■ エフデ ...聖絶されたベニヤミン族の生き残り。

ベニヤミン(右の手)なのに左利き。エグロンを騙し討ちした。

主の憐れみによって、士師で最長の80年の平和を得た。

■ シャムガル ...出自不明。牛飼い。偶像神の名を持つ異端の戦士。

牛の突き棒で強敵ペリシテ人600人を討ち取った。

■ オテニエルをピークに、士師の性質は劣化していく一方。

➔ 最高の士師オテニエルの時に、最悪のベニヤミン聖絶の出来事が!!

【士師の時代の本質とは？】

■ ベニヤミン族の聖絶という最悪から始まり、最悪の士師サムソンへ。

➡ 最悪の出来事が最後に記述。残る印象は、絶望的なものでしかない。

■ モーセ五書・律法も、読者を絶望に導く。

➡ 罪ある民には、限られた法すら守り通す力はない!!

➡ 約束の地を与えられても、性懲りもなく民は罪を繰り返す。

■ 私たちクリスチャンもまた、落胆と失望から逃れられない。

➡ どうしようもない罪を認め、主イエスの福音にすがって救われた!!

➡ それでもなお、古い性質を引きずって、罪を繰り返す私たちがいる。

絶望こそが、士師記のゴール

しかし、絶望は絶望で終わらない!!

【逆説的な神の救いを味わい知り、信仰の成長を得て行こう】

■ 絶望こそが、本当の救いの始まり。

自分の貧しさを思い知った者は、神の幸いへと導き入れられる。

■ 士師の時代にも残された信仰者はいて、希望の灯火は失われなかった。

■ 絶望の中で示されるのは、ただ主にすがるしかないということ。

自分の弱さを思い知らされて、私たちは、真実の主に出会わされる。

■ 主は、最悪の士師の時代をも根底で支え、民を悔い改めに導かれた。

今この背教の時代をも、主の御手は変わることなく支え続けておられる。

■ 悔い改め、主を呼び求めるなら、主の御霊がこの身を心を満たしていく。

裸にされた心で、御許に立ち返ろう。栄光の主の御顔を仰ぎ見よう。

主が、慈しみの御手で包みこみ、再び立ち上がらせてくださるから。

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの罪を贖(あがなう)うために十字架で死に、

②墓(はか)に葬(ほうむ)られ、

③三日目に復活(ふっかつ)したことを信じます。

イスラエルの絶望(ぜつぼう)の時代(じだい)にも、主の御手(みて)は民(たみ)を離(はな)れることはありませんでした。今この背教(はいきょう)の時代にあっても、主がすべてを支(ささ)えておられます。

わたしは無力(むりょく)です。あなたのたすけがなければ何もできません。

どうか、御霊(みたま)によってこの身を満(み)たし、立たせてください。

士師(しし)たちのように、主の力によって、もちいてください。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」